『アフリカの人々と名付け』▶ 小馬　徹

▼75

名前の民族性と国民性

■洗礼名と「クリチャン名」

アフリカの人々の今日の名付けを変化させている最大の要素の一つが、キリスト教の直接的・間接的な影響である事は、疑いがない。

ケニアでは、イスラム教徒とアジア人を除いて、或る年代以下の人々のほぼ総てが、キリスト教徒的な名前を持っている。本稿では、それらを「クリスチャン名」と総称するが、日常生活における「クリスチャン名」と人々の関わりについては、意外にも具体的な報告が乏しい。そこで、まずキプシギスの事情を見ておこう。

私の調査地では、カソリックが他を圧して有力で、改宗者のほぼ80%を占める。熱心なカソリック信徒は、自分の赤ん坊に仮りの洗礼をさせ「クリスチャン名」を与える。信徒は圧倒的に女性が多く、父親が伝統主義者という場合が少なくない。10代半ばに近づくと、正式の信仰を得るために6ヵ月から24ヵ月程の期間に幾つかのコースを受講する。その後のテストに合格すると堅信礼で信仰を告白し、水中で実際の洗礼を受ける。この時に、赤ん坊の時に貰った「クリスチャン名」を本当のクリスチャン名に変えるのである。キプシギスへ最初にやってきた教会であるAGC（African Gospel Church）でもほぼ同様だが、最近勢力を延ばしつつあるChurch of Godは、帰依者を即座に洗礼させる。

■堅信礼とイニシエーション

洗礼を機に、（母）親に貰った「クリスチャン名」を変える例が少なくない。この年齢は丁度民族のアイデンティティの核を形成するイニシエーションを受ける年齢に当たり、独立した人格を得たという自己主張がその背景にある。

だから、堅信礼を受けるほど熱心ではないがキリスト教会との微温的な関係の維持を望む者も、イニシエーション終了後、自分の意志で「クリスチャン名」を変える事が多い。また、イニシエーションを契機として伝統主義を選択した者は、聖書の脈絡に因む「クリスチャン名」を聖書の文脈に直接関わりのない「クリスチャン名」、つまり単なる欧米風の名前へと変更するのが普通である。

ただ、それらのどの場合も、それまでの「クリスチャン名」は人々の記憶の中に生き続けていて、容易に消え去らない。その結果、同一人物が往々2つの「クリスチャン名」で知られる事になる。

■役割モデル

「クリスチャン名」を変える事が多い理由は、別のところにもある。それは、親、とくに母親たちが土地の神父に強い影響や感化を受ける事が多く、彼の洗礼名を男の赤ん坊の「クリスチャン名」にしがちだからである。私の調査地にあるンダナイ・カソリック教会の誕生登録簿を見せて貰った。すると、或る年などは、男の赤ん坊の「クリスチャン名」の届けがほとんど全て同じになっていて、本当に驚いたものだ。つまり、キプシギスの「クリスチャン名」には、「あやかりの論理」、言い換えれば役割モデルとしての意味が強いと言えるだろう。

この点で興味深いのは、1970年代末後半から1980年代初めにかけて、娘たちの間でJ-nameが大流行した現象である。J-nameとは、Jane、Jenny、Janet、Jacqueline、Julianaなど、ともかくもJで始まる「クリスチャン名」である。中には、元々の「クリスチャン名」を残す一方、ミドル・ネームのように使われる伝統的な幼名を省いて、J-nameをその代わりに使う娘もいたし、変異が少ないからかJoycernという名前を発明した者もいた。

他方、やや時期はずれるが、若者の間では

Benson、Bobson、Ericson、Henderson、Jackson、Jonson、Nelson、Samson、Tomsonなどの、son-nameが流行った事がある。また、別の機会には、Dan、Jack、Willy、Robaなど、略称や愛称風の名前が好まれた時期もある。

■個人名という尻尾

ところで、連載第73回では、キプシギスや南部のカレンジンに特有の父称を示す尊称である*arap*が、身分証明書に登録される名前から省かれる事を報告した。そして、恐らくそれは、国民国家が個人の登録名から民族性を排除して国民の統合を高めようとしているゆえだと述べた。ただ一方では、同じ動きは、カレンジンの尊称が南部では*arap*であるのに対して北部では*wero*である差異を埋め、新たな民族形成運動としてのカレンジン現象を助長するだろう事も指摘しておいた。

前節までに紹介した若者たちの一連の動向は、軽薄にさえ見える。ただ、個人名と民族性の関わりがもつ政治的な意味を考慮すると、それらが、或る種の時代の精神ともいえるものに結び付いているように思える。即ち、若者たちは、伝統的な個人名が否応なく引き寄せてしまう民族性の表象の重みを捨て去りたいのだ。彼らは、国民国家に集約される現代的な諸価値に共感的であり、それに身をすり寄せているのだ。

同じ第73回では、半ば国家経済の外側にいると神話化されるマサイ人でも、ビーズ製の「腕時計」を身に付ける事に触れた。そうすることで、彼らは国家の尻尾であるtimeという表象を捕まえておきたかったのだ、と。キプシギス人の若者は、個人名の脱民族化という尻尾を掴もうとしたのではなかったろうか。

■名前の悲劇

そうした気分は、現在も強まりつつある。

前回登場したCollins Kibet arap Rotichという若く聡明な教師は、できれば自分の名前をCollins Masitoniという単純なものにしたいと語った。Masitoniは白人農園で働いていた一人の祖先の名前で、彼が白人の目を盗んで食物を「ブッシュに」（スワヒリ語で*msitoni*）隠した事に由来する渾名だ。彼がこの名前を好もしく思うのは、民族性が抹消されるからである。

カレンジンの個人名は、実は、私たち日本人にも馴染みのないものではない。ここ4半世紀以上の間、カレンジンはケニア代表として、世界の陸上競技の中長距離部門を席捲して来た。それは、アフリカ大断層崖の斜面に当たる赤道直下の高原での放牧という暮らしの伝統と、身体的な資質の結果である。ケニアの新聞には、それを訝る、「なぜ我々の偉大な代表選手たちは皆Kip-某やChep-某ばかりなのか？」という類の投稿記事が散見される。カレンジンの複数の個人名のどれかには、大概KipやChep-という接頭辞がつくのである。そうしたカレンジン特有の名前も、尊称である*arap*も、Collinsには鬱陶しい。

実は、カレンジンの名前には、輝かしい栄光の反面、悲しい歴史の現実がある。

カレンジンは、リフトバレー州に住む農牧民だが、ケニアの独立（1963）を大きな契機として、人口圧の高まりに苦しんでいたバントゥ語系の農民が彼らの放牧地に大量に移住し始めた。両者の土地をめぐる不断の小競り合いは、1991年10月、ついにカレンジンによる大規模な焼き討ち事件を生み、バントゥ語系の農民移住者に大きな被害が出た。その後も、紛争が繰り返され、カレンジン出身のモイを大統領とするケニア政府は事態を放置したとして国際的な非難を浴び、国内政治は紛糾の度を深めた。

バントゥ語系の農民たちは、首都ナイロビとカレンジンの住むリフトバレー州の結節点に位置するナクル市で逐一バスを止め、乗客の身分証明書を検査した。そして、カレンジン的な名前の者を引きずり降ろして報復した。命拾いをしたのが、偶々カレンジン的な特徴の目立たない個人名を登録していた者たちだった。名前が何であろうと自分は自分であり、ケニア市民なのだと、大学卒のCollinsはいう。

（こんま　とおる　神奈川大学　社会人類学）